

# 「造形表現を楽しむためのいくつかの試み」

伊藤 昭博

Some Trials to Enjoy the Plastic Arts Expression

Akihiro ITOH

## はじめに

授業のはじめに、学生たちに「絵を描くこと、ものを創ることが好きか、嫌いか」という質問をしてみた。驚くことに、70%以上が苦手意識をもっているのである。(この苦手意識の中には、嫌いではないが、苦手であるも含まれる)

次に、「いつ頃から、苦手意識をもつようになったか」を聞いてみると、大半が、小学校高学年位で、あとは中学生になってからということであった。

それでは、なぜこの頃から苦手意識をもつようになったのであろうか。原因の一つには、絵のコンクールがあげられる。コンクールのために描かなければならないとか、入選したり、落選したりで差をつけられてしまうということである。これでは、上手な人が評価がよく、下手な人は評価が悪いといった価値観を生んでしまっている。

自分は下手だから、絵は描かない、人にも見られたくないという苦手意識を、引きづりながら、学生たちはここにいるのである。

絵を描く、ものを創るためにはその苦手意識を、まず取り除かなければならない。そのためには、受身ではなく自発的に関われるような場所と時間と材料を設け、自分たち自身で考え、イメージを湧かせ「やろうと思えばできるんだ」

ということを実感することである。とにかく絵を描く、ものを創るという行為は、楽しく生き生きできるものでなければならぬと考える。

以上のことを前提に、「造形」「図画工作」の授業の中で、いくつかの実践を試みた。

## ●「造形」「図画工作」の授業カリキュラム

1. 海辺の散策
2. 木の箱
3. 動物の帽子
4. 野外での造形あそび
5. フロッタージュをもとにした絵画表現
6. 紙の箱

### 1. 海辺の散策

最初の授業は、海へ行くことにしている。これは、まず気持ちを開放させるということが考えにある。場所は、上人ヶ浜公園の浜辺である。課題の内容は、「この浜辺で、自分自身が興味を持ったもの、何か気になったものを拾い集める」というものである(写真1-①)。この時間は約1時間位であるが、その間は、拾うことだけが目的でなく、浜辺を散策しながら、気持ちをリラックスさせるものでもある。友達同士で一緒に会話しながら散策する者、銘々別れ一人で無我夢中で探しまわる者、ボーっとしている者、学生それぞれの時間を過ごしていく。こういう時間は、日常生活の中で果たしてどれくらいあ



上人ヶ浜での散策風景（別府）〈写真1-①〉

るのだろうか。絵を描く、ものを創るという行為では、まず気持ちを開放させ、何を感じ、何を表現したいかが重要である。子供の時は、遊びの中から、そういった行為（絵を描くこと、ものを創ること）が、自然に生まれてくる。しかし、大人になるにつれ、こういった遊び心は失われ、いかに上手に絵を描くか、絵は下手だから描きたくないという考え方になってくる。この遊び心を取り戻すには、まず子供の気持ちに還ることである。海に行くことにより、気持ちを開放させ、子供のころ遊んだことを再び蘇らせることである。上手下手関係なく、いかに楽しむかが問題である。楽しんだ結果生まれてくるものは、見てても気持ちがよいもので、作品を見ただけでも、いかに遊んだかがよく伝わってくる。

時間が経ち、拾い集めたものを、みんなで見せ合う（写真1-②）。そこには、貝殻、流木、松ぼっくり等の自然物や、ビンのかけら、プラスチック容器が変形し、変色したもの等の人工物がある。各々、拾ってきたものを見ると、それぞれに、興味を持ったものの違いがあっおもしろい。お互いを見せ合うことで、相手の意外な一面を見たり共通するものを感じたりすることができる。

このことは非常に重要なことで、言葉だけでは、普段感じる事ができないことを、自分が興味をもった形（もの）で表現することで、互いにそれぞれの何かを感じ合うことができる。目で見えているのは、確かにもの（物体）であ

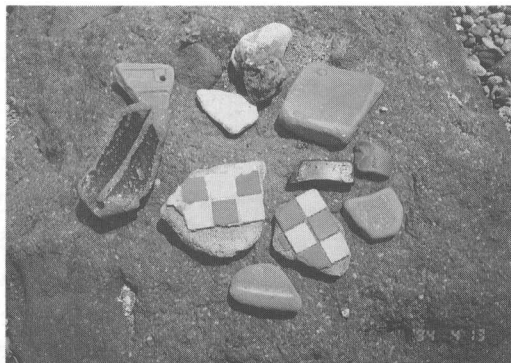


拾ってきたものをみんなで見せ合う  
〈写真1-②〉

るが、それを通していろんな世界を想像することができれば、お互いのコミュニケーションは成り立つのである。

学生たちが拾い集めたものの中に、宝石があった。ただのビンのかけらであるが、子供たちはこれをダイヤモンドとか呼ぶかもしれない。色は、透明や緑、茶、青等で形はビンのかけらにしては、鋭くなく、丸みを帯びている。色もまた、もとのビンの色に変色している。これは、人間が作り出したものが捨てられ、割れて破片になり、そして、波や海の塩分や、風、つまり自然の力によって創り出されたものである。このまま、知らずに放って置けば、いつかは砂に還り、海へ流されていくのであろうが、その一時点を私たちは拾い、夢を見させてもらっている。人間は美を追求し色々なものを創り出しているが、また、人間が創り出したものが自然に還ろうとしているときの美もある（写真1-③、④）。

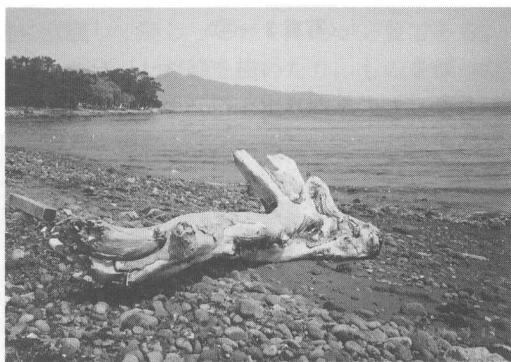
そこには、人間の力と自然の力が作用している。一つのを拾う（見つける）ことにより、過去のこと、未来のことを感じることもできるのである。そのことが、自分自身の美を追求し、ものを創り出す行為へとつながるのである。



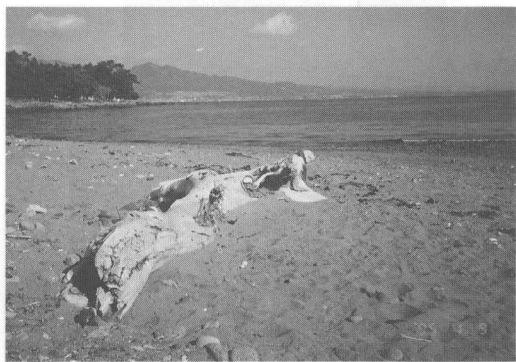
拾ってきたもの タイル、植木鉢、瓦の破片等  
〈写真1-③〉



拾ってきたもの 松ぼっくり、ピンの破片、  
貝殻等 〈写真1-④〉



1994年4月13日の流木 〈写真1-⑤〉



1995年1月9日の流木 〈写真1-⑥〉

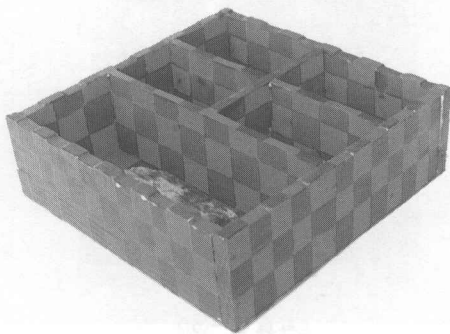
・「時間が経ち、自然の力により変化していく流木と砂浜」

## 2. 木の箱

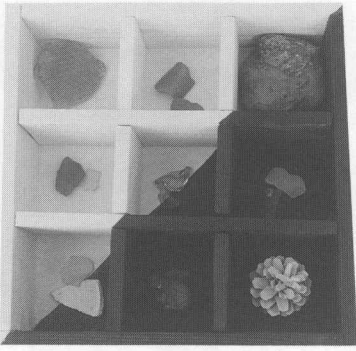
海で拾ってきたものを入れる箱をつくる。材料は、杉のぬき板(2m×9cm×1cm)1本づつ使い、箱の形、サイズは自由にし、箱の中にしきりをつくる。でき上がった箱に色を付ける(模様や絵を描く)。その場合、箱の中に入れるものをイメージしながら色を付けていく。つまり、完成した状態が箱の中のものと一体化した作品になるようにする。ただ拾ってきたものを集めるだけでなく、今度は自分たちの作った箱に入れることによって、拾ったものがどのように見えるか、どのように見せたいかを体験する(写真2-①, ②, ③, ④)。

これは、外の世界から箱の中の世界(自分の世界)に移すことによって何でもなかったものが特別なものになることを意味する。これをそ

れぞれが試行錯誤しながら、楽しく創ることに  
より、ものの見え方の違いを発見し、自分自身  
にとっての美意識を高めていく。学生の一部に  
は、箱に色を付けることでそれが発展し、箱の  
中の拾ってきたものにも色を付ける者もいた。  
これは、箱と拾ってきたものとの関係を探っ  
ていく中で、自然発生的な行為である。この学生



〈写真2-①〉

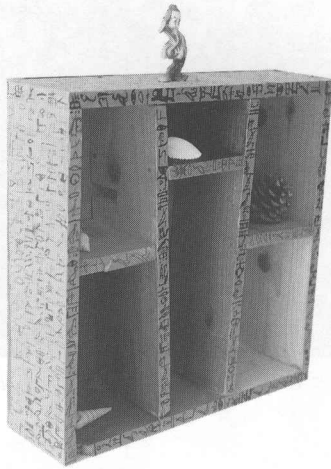


〈写真2-②〉



〈写真2-③〉

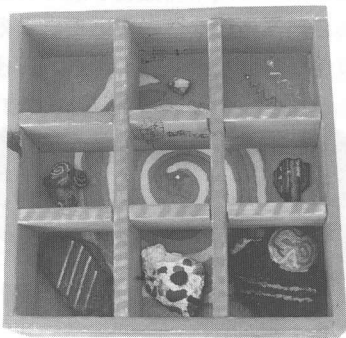
にとって箱の中のものをも一体化して作品にすることは、箱の中のものにも手を加えることで成り立っている(写真2-⑤, ⑥)。箱に色を付けることで完結せず、中のものまで行為が広がっていったことは、その学生の新しい試みであり、可能性を探る第一歩でもある。このように絵を



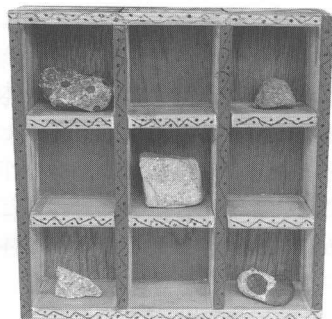
〈写真2-④〉

描いたり、ものを創り出す行為の中で重要なことは、可能性を探り、手が動くか、動かないかということである。

人間は、頭の中で考えるだけでなく、手を動かしながら考えていく。それによって、創り出されたものを目で見て感じ、また次にどのように動いていくかを判断していく。この手を使って考えていく行為の積み重ねで、新しいものが生み出されていく。これらの過程の中には設計図や、手順というものには存在しない。一つ一つ手を動かして考えていくうちに、新しいイメージが生まれ、そして壁にぶつかり、またそれを克服し、自分自身にとっての魅力あるものを発見していくのである。



〈写真2-⑤〉



〈写真2-⑥〉

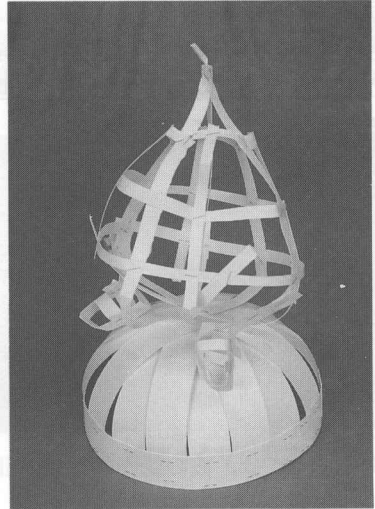
### 3. 動物の帽子

最初は、紙によって色々な動物を作るというのが予定であった。しかし、それだけでは物足りなくなり、帽子を作り、その上に動物を乗せることにした。自分たちが作ったものを頭にかぶることで、みんなの笑いが生まれ、それを使って遊びを考えるきっかけになったことは、予想以上に大成功であった(写真3-⑤, ⑥)。このように、絵を描いたり、ものを作って楽しむ場合、ある決まりに従って作るのではなく、どうしたらおもしろいか、どうしたら楽しめるか、常に意識して関わっていくことが必要である。子供たちは、ただ絵を描いたり、ものを作った

りするだけでなく、その作ったものを身に付けたり、遊びの手段として使うことで自分たちの世界を創り出し、いろんなイメージを次から次へ生み出していく。そのことで、今度はこういった材料でこういうものを創ろうと、さらに遊びから造形表現が広がっていく。このことを理解し、保育者は寛容な気持ちで、子供たちの遊びを見守ることが必要である。大人の現実の世界とは違い、子供たちは子供たちの夢の世界があり、ルールがある。保育者は、そのことが十分にできる環境を創ってやることである。無理に創るということではなく、できる範囲の中で、一つ一つ工夫して創ってやるのが大切である。そして、子供たちが楽しめる世界を作ってやるのではなく、子供たち自身が創れるように



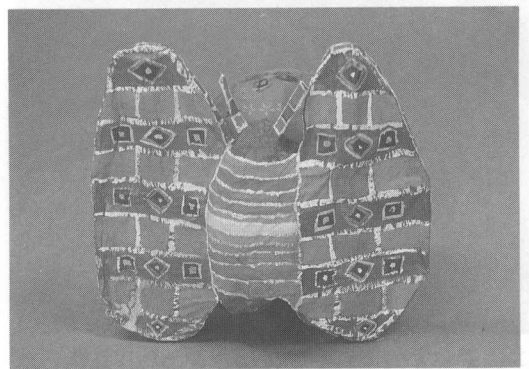
制作風景 〈写真3-①〉



制作過程 (ケント紙による骨組) 〈写真3-②〉

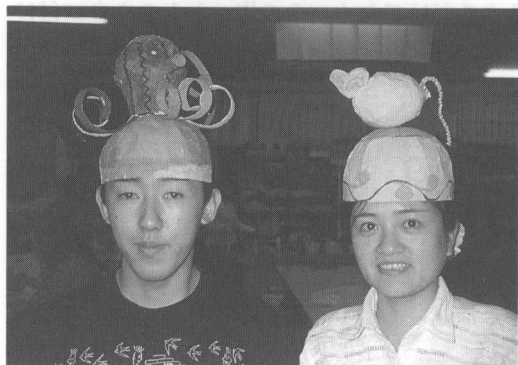


完成作品一鳥一 〈写真3-③〉

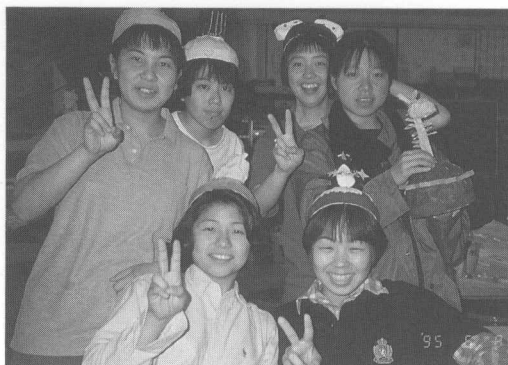


完成作品一ちょうちょ一 〈写真3-④〉





完成作品をかぶり記念撮影 <写真3-⑤>



完成作品をかぶり記念撮影 <写真3-⑥>

きっかけを与えるのである。このきっかけというものは方法があるのではなく、保育者自身が探していかなければならないもので、これは、いかに子供たちと関わるかで違いがでてくると考えられる。その子供たちの立場に立って、どれくらい保育者が子供たちの世界を共有できるか、つまり保育者自身が子供（子供の世界）に還れるかということにつながる。

#### 4. 野外での造形遊び

イギリスの美術家でアンディー・ゴールズワージーという人がいる。彼の制作場所は、山や海で、かわらの石ころや落ち葉、雪等さまざまな自然の素材を使って、不思議な世界を創り出している（写真4-①、②）。

（写真4-①）は、彼の制作風景で、紅く色

付いたもみじの葉を川の水たまりから岩へ向かって一列に並べている。

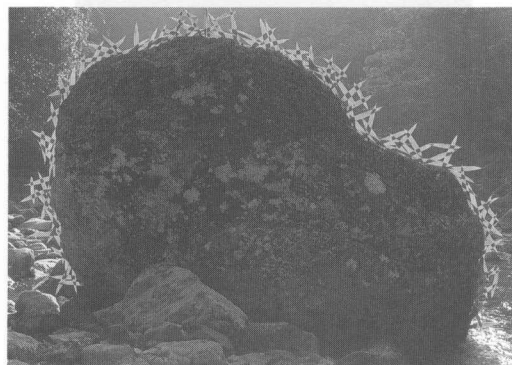
（写真4-②）は、彼の作品で、朝日に向かって笹の葉で岩を縁どったもの。

このように、自然の風景の中に人間が自然物を使い、新たな表現を加えることでその風景は一変し、これまでより一層、その風景（空間）を意識することになる。おそらく、この作家の頭の中には、常に彼が存在するあらゆる場所で遊び心が、湧いているのであろう。

自然の風景の中に、自分自身の表現行為によって、新しい自分自身の風景を創り出そうと試みているのである。こういった行為は子供の頃、多くの人が経験してきたと思うが、大人になるにつれ、どうしてもよくなってしまったのかもしれない。実は、このことは非常に重要なことで、忘れてはならないことである。



アンディー・ゴールズワージー制作風景 <写真4-①>



アンディー・ゴールズワージー作品 <写真4-②>



学生作品 パイナップル 〈写真4-③〉

彼にとってその行為は自然と人間のコミュニケーションで、互いに呼吸するものである。これは、紅く色付いた葉や、風に揺れる黄金色のスキを見て、美しいと感じるようなことが原点にあるようである。

前提講義で以上のことを説明し、いくつかの彼の作品のスライドを見せた後、私たちも海へ出かけた。

場所は、前に行ったことのある上人ヶ浜公園で「アンディー・ゴールズ ワージーごっこ」と名付け、1時間程いくつかのグループに分かれ、公園や砂浜を使い制作に励んだ。

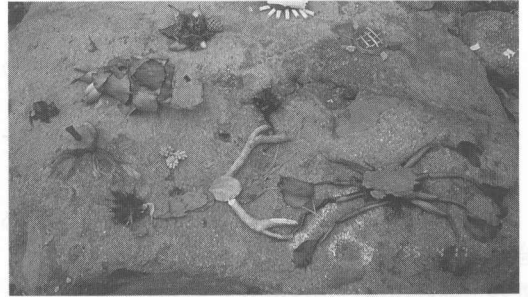
その時、でき上がった作品をみんなで鑑賞して廻って見ることにした。いくつかおもしろい作品があったので、紹介することにする。

(写真4-③)は、公園のソテツの木のまわりに黄色い花を付けたもので、タイトルは「パイナップル」。高さ2m程の巨大パイナップルである。これは沖縄の学生たちが作ったもので、地域性が出ていて興味深い作品である(なかなかユニークな発想である)。

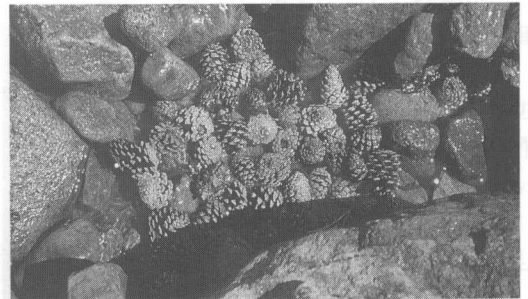
(写真4-④)は、落ち葉を集めてその中に石ころが置いてある。タイトルは「鳥の巣」。中の石ころが卵で、まわりの落ち葉が鳥の巣のイメージらしいが、これも大きく直径1m50cm位のものである。



学生作品 鳥の巣 〈写真4-④〉



学生作品 さかな、カニ、サソリ、カメ  
〈写真4-⑤〉



学生作品 松ぼっくり 〈写真4-⑥〉

(写真4-⑤)は、浜に打ち上げられた草や、木の枝、ビンの底などで、カニやサソリ、カメなどを作った作品。いずれも、自然物や、人工物の形態をうまく生かして作ってある。

(写真4-⑥)は、浜辺に石ころで囲んだ池を作り、その中に公園で拾った松ぼっくりを入れ、波によって転がる様を楽しんでいる。水に濡れた松ぼっくりは、普段より一層美しい色合いで、波の光とともにキラキラ輝いていた。このように、人間の行為を自然の力(波の力)にゆだねることによって美しく、感動する場面に出会えることは新しい発見であり、何とも言え

ない喜びである。例えば、シャボン玉は人間がシャボンを膨らまし、それが風によって舞い上がっていく。シャボンの表面には、青紫色に輝いた世界が映し出される。これも、人間の行為を自然の力にゆだねた結果、創り出された作品なのである。自然とうまく付き合い、ものを創り出していく。そして、楽しませてもらう。思わぬところに、驚きがあったり、発見があったりする。このことは、生きるためのエネルギーになると考えられる。人間が人間らしくあるために、必要不可欠なものである。

以上のように、私たち人間を取りまく自然の中には、無限にものを創り出すヒントがあり、それをどう引き出すかは、人間の手に掛かっているのである。私たちは自然と対話しながら、ものを創ることを楽しむことができるのである。

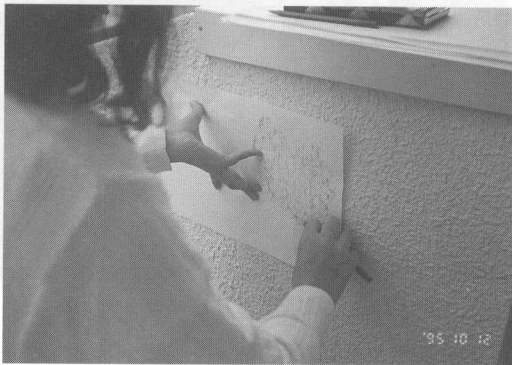
## 5. フロッタージュをもとにした絵画表現

まず、紙と鉛筆を持ち、校内のあらゆるものを紙に鉛筆で写しとる行為（フロッタージュ）を1時間程行う（写真5-①、②）。

写しとってきたものは、壁や床のタイル、葉っぱ、クルマのナンバープレートとさまざまで、日常気にもとめないものが紙をあて鉛筆で擦ることにより、おもしろい表情を見せてくれる。これは、ものを触った感触が視覚的にどのような形で現れるか、わくわくしながら楽しむことができる（写真5-③、④）。

次に、写しとってきた模様や文字をいろんな形に切り取り、画用紙にのり付けし、自分たちの絵を作り上げていく（写真5-⑤、⑥）。

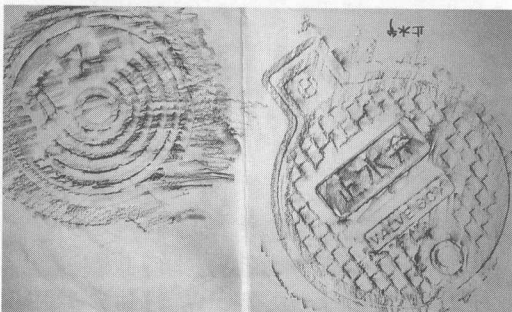
何も無いところから絵を描くというのは、絵を描くことに対して苦手意識を持っている学生には、難しいことと思われる。そのきっかけと



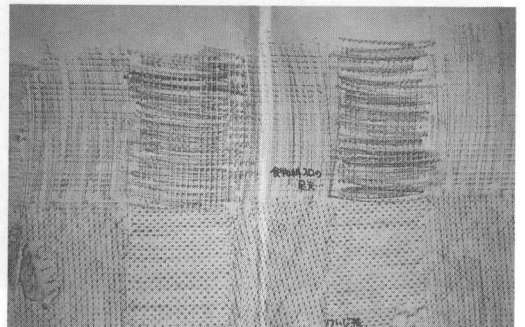
フロッタージュ制作風景〈写真5-①〉



〈写真5-②〉

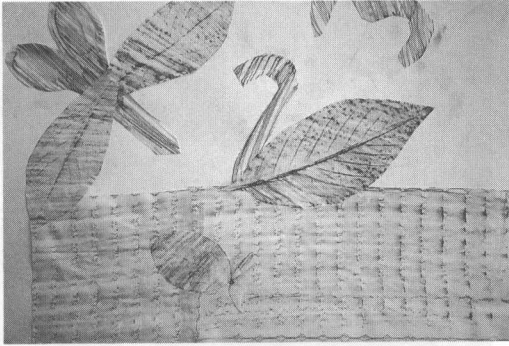


フロッタージュしたもの〈写真5-③〉



フロッタージュしたもの〈写真5-④〉





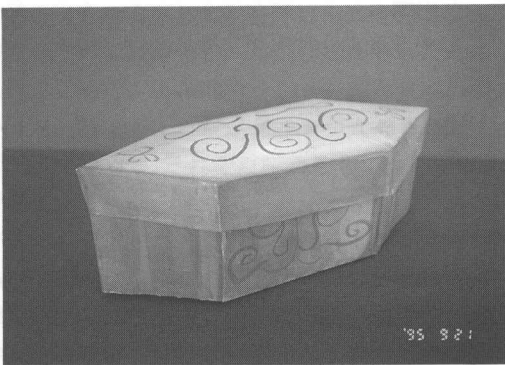
フロッタージュをもとにした絵画表現  
〈写真5-⑤〉

して、フロッタージュしてきたものを絵の一部にして使うことにより、いろんなイメージを湧かせ絵に対するコンプレックスを解消することができる。

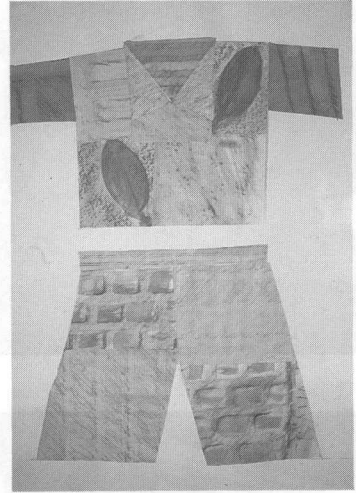
頭の中でイメージしても出てこない抽象的な形や模様が、フロッタージュ（壁を擦ったり、床を擦ったり）することにより現れてくる。そこには、擦った人間にしかわからない発見と感動がある。出てきた抽象的な形や模様から、自分の未知の世界を絵にすることで、新しい何かを体験し、創ることの喜びを覚えるのである。

## 6. 紙の箱

箱というと、ものを入れるためのものとして使う場合が多い。もちろん、そのための箱でもあるが、今回作った箱を使っていろいろ遊んでみることにする。



〈写真6-①〉



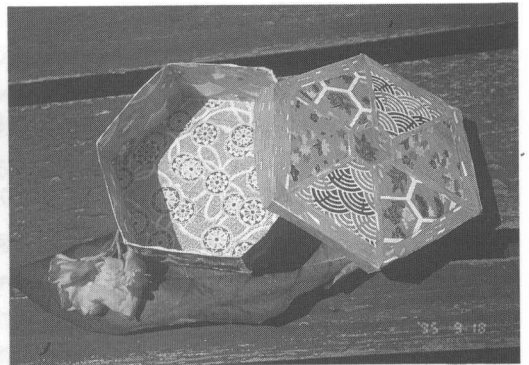
フロッタージュをもとにした絵画表現  
〈写真5-⑥〉

材料は、A3のケント紙1枚を使い、形は自由で原則としてフタを付ける。箱の外側、内側とも色を付けることとした。

(写真6-①)は、学生作品で、四角い箱と違い、自分なりの形を工夫している。色や模様にも気をつかい美しく整った作品である。

(写真6-②)は、学生作品で、正六角形の箱を作り、その表面に千代紙でのり付けした作品。箱の外側と内側の色合いの関係がうまくいっている。

次に、完成した箱をもって全員中庭に集合した。ここでは、自分たちが作った箱を使って、中庭の自然物を組み合わせて遊ぶことにした。それぞれが思い思いに場所を見つけ、でき上が



〈写真6-②〉



〈写真 6-③〉



〈写真 6-④〉



〈写真 6-⑤〉



〈写真 6-⑥〉

ったところで撮影する。箱が自然物の中で(写真6-③, ④), もしくは自然物を箱の中に入れること(写真6-⑤)により, 作った箱がどのように見え, また, その風景がどういう風に変化したかを感じとることが大切である。中庭の緑の中に人工的に彩色された箱が, まるで鮮やかな花のように咲いているようであった(写真6-⑥)。

#### おわりに

絵を描く, ものを創るという行為は, それ自体が目的であるのではなく, 人間が人間らしく(喜んだり, 笑ったり, 悲しんだり, 怒ったり)生きていくためのエネルギーの一つと考える。人によっては歌であったり, 踊りであったり,

スポーツであったりするであろう。何かを表現していくことが人間にとっては必要なものであり, 生きる力になるのである。とにかく, 自分にとって本当に楽しく, 大切なものを一つ一つ創り上げていけばよい。そして, それぞれ自分たちが創り上げたものをお互い見せ合い, それを理解し, 共有することでみんなが楽しく有意義に過ごせるのである。

その糧として, 絵を描くことや, ものを創ることがあるような気がする。

#### 参考文献

- 「アンディー・ゴールズワージー ふたつの秋」  
栃木県立美術館 (1993)  
世田谷美術館 (1994)